

現代イランにおけるマルジャア・アッ=タクリード（法学権威）

平成 18 年入学

派遣先国：イラン・イスラーム共和国

黒田 賢治

キーワード：法学権威，シーア派，イラン，政治，宗教界，教育，聖者

対象とする問題の概要

現代イランでは、宗教と政治という問題が社会的問題となっている。信仰生活において神から啓示されたイスラーム法を遵守するムスリムにとって、宗教法学はことに重要視される学問分野である。19世紀半ばに、12 イマーム・シーア派内で確立された、マルジャア・アッ=タクリード (marji' al-taqīd) は、宗教法学の最高権威として、一般信徒の信仰生活の行動規範の役割を担っている。しかしながらイスラーム法の法規定の範囲は、日常生活のみならず、社会生活をも規定している。イラン・イスラーム革命の指導者であったホメイニー師も同時代のマルジャア・アッ=タクリードであった。師のその活動に示されるように、解釈の伸張によって法学権威の法解釈は既存の社会体制を覆す社会運動へと発展する場合もある。



図 1 イマーム・ホメイニー廟

現在のイランの政治体制は、そのホメイニー師の解釈に基づいた法学者が権力ブロックの中枢を担う「法学者の統治 (Wilāyat-i Faqīh)」体制である。しかしその一方、「法学者の統治」体制において、法学権威が宗教法学の最高権威としての活動に関して先行研究では十分に扱われてこなかった。本研究は先行研究の空白を埋める一方、現代イラン政治について宗教界の側から分析のアプローチを行うものである。

研究目的

本研究の目的は、大別して二つに分けられる。第一に、動的な現代イラン政治の分析があげられる。現代イラン政治の分析要素として、従来見過ごされてきた潜在的に社会的影響力をもつ法学権威というセクションを分析することで、現代イラン政治を理解することにある。第二にイランのみならず、シーア派が文化的ヘゲモニーを確立している社会における政治変動の分析があげられる。これらの研究目的は、宗教が国家という単位によって規定されるものではないという事実に基づくものである。

両研究目的の分析手法として、宗教社会学並びに歴史学を中心として、法学権威並びに現代イランのシーア派宗教界の全体像を明らかにする。

フィールドワークから得られた知見について

本フィールドワークは、主に法学権威ならびに政治権力ブロック中核に位置する法学者たちを産出す

るシーア派宗教界の宗教者育成機関に関する情報収集を目的におこなわれた。情報収集は第一に関係者からのインタビュー、第二に文献収集という形で行われた。

インタビューは、主に法学権威事務所に入出入りする神学生、また外国人用神学校の関係者を中心におこなった。法学権威事務所に入出入りする神学生とのインタビューによって、彼らの教授にあたる法学権威との関係が明確となった。彼らにとって法学権威は単に学問的な師であるだけでなく、彼らの日常生活を金銭的に保障する役割を果たしていた。また彼らのなかには学生として俸給を受けるもののほか、法学権威事務所の職員として従事するもの、あるいは法学権威機構傘下の図書館をはじめとした関係施設の職員として従事するものが多数確認することが出来た。また外国人用神学校の関係者とのインタビューから、国際的なシーア派のネットワークの維持・拡大という戦略が明らかとなった。



図 2 外国人用神学校



図 3 法学権威故ランジャーニ
ー師を偲ぶポスター

第二に文献収集は、イラン史・イスラーム史専門図書館において稀見資料の複写を行うとともに、ブースターン書店やコム市内中央部に集中する出版社において現代イランにおけるシーア派宗教界に関する研究書を多数入手した。

これらの調査に加え、本フィールドワーク中に本年6月に死去された法学権威ファーゼル・ランジャーニー師の40日目の喪明け集会に参加した。同集会への参加は、同師のご子息で高位の法学者であるジャワード・ランジャーニー師から許可をいただいた。

同集会への参加によって、現代イランにおいて法学権威が宗教界において影響力をもち、一般信徒の行動規範であることのみならず、法学権威に対する尊敬と一種の聖者性を確認することが出来た。

今後の展開・反省点

今後の展開として、2点あげられる。第一は本調査によって入手した文献の分析があげられる。本フィールドワークにおいても、テヘラン大学歴史学部教授でありイラン史・イスラーム史館長であるラスール・ジャアファリヤーン氏並びに同図書館司書アブザーリー氏の多大なる尽力により、稀見資料の複写が可能となった。入手した文献資料は、イランで出版されている現代イランのシーア派宗教界研究に関する論考が中心であり、博士予備論文の文献資料として活用していく。